

大学入学共通テストの英語の点数と 英語資格・検定試験のスコアとの相関性について

木村 智志（九州工業大学），田中 泉（福岡工業大学短期大学部）¹⁾，
河野 悟史，安永 卓生（九州工業大学）

中学校・高等学校の英語教育は以前にも増して言語活動の高度化が進められており，それに合わせ高大接続改革の一つに大学入学共通テストにおける英語資格・検定試験の活用が掲げられた。本研究では，共通テストは英語の得点を英語資格・検定試験と同様に総合的な英語力を評価できているのか，共通テストの英語の得点を英語資格・検定試験で置き換えることに妥当性があるかについて検討した。その結果，TOIEC IP よりも実用英語技能検定及び GTEC のスコアの方が共通テストの得点と正の相関が強かった。このことから共通テストは 2 技能評価に近いものの英語資格・検定のスコアと同様に総合的な英語力を評価する試験として妥当であると考えた。

キーワード：英語資格・検定，英語，大学入学共通テスト，CEFR，換算表

1 はじめに

1.1 英語教育改革と高大接続改革における大学入学共通テスト実施方針の発表と撤回

文部科学省は，2010 年の「外国語能力の向上に関する検討会」の設置や，政府の教育再生実行会議「第三次提言」（2013）等を経て，2013 年 12 月に初等・中等教育を通じた英語教育改革を計画的に進めるべく「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定した。2013 年のこれらの報告や提言などの中で，高等学校での英語教育は従来の「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠」

（以下，CEFR）における A2～B1 から B1～B2（自立した言語使用者）に引き上げられ，言語活動を高度化（発表，討論，交渉等）することが求められた。さらに文部科学省の有識者会議では東京オリンピック・パラリンピックの開催を見据えて「大学入学選抜の在り方を抜本的に見直すべきとの観点や，資格・検定試験の活用に関する協議会の必要性や取組を明確にすべき」と指摘され，初・中等教育を通じて新たな英語教育改革を順次実施できるように検討を進めるよう促した（英語教育の在り方に関する有識者会議，2014）。

これらを踏まえて進められた英語教育の抜本改革と高大接続改革により，2017 年に文部科学省から「大学入学選抜においても，『読む』『聞く』『話す』『書く』の 4 技能を適切に評価するため，共通テストの枠組みにおいて，現に民間事業者等により広く実施され，一定の評価が定着している資格・検定試験を活用する。」（文部科学省，2017）という発表があり，

これに基づき文部科学省高等教育局長通知(2019)「令和 3 年度大学入学選抜に係る大学入試英語成績提供システム運営大綱」において「大学入学共通テストの枠組みにおいて，現に広く実施され，一定の評価が定着している資格・検定試験を活用する。」と発表された。この発表で将来的に大学入学共通テスト（以下，共通テスト）における英語の試験が英語資格・検定試験に置き換わるということが確定的となり，高校における進路指導の現場にも大きく影響を与えた。

しかし，経済格差や地域格差等の公平性の問題や CEFR の本来の趣旨（言語学習の行程を明確化し，学習者・指導者などが共有するために策定）を考えるとこれらを入学試験に用いることには問題があること（日本学術会議，2020）が指摘されるなど，様々な批判の結果，2021 年度選抜における「大学入試英語成績提供システム」の導入を見送ることが発表された（萩生田，2019）。さらに，大学入試のあり方に関する検討会議（2021）において，公平性・公正性の観点等から，民間試験を大学入学共通テストの枠組みに導入することは妥当でないという提言がなされ，2022 年度以降も引き続き，共通テストにおいて英語の試験が実施されることとなった。

その一方で，「『話す』，『書く』を含めた総合的な英語力は，高等学校までの教育課程において重視され，卒業後の社会における必要性を踏まえて大学教育でもその伸長の必要性が合意されているため，総論としては，高等学校教育と大学教育を接続する大学入学選抜においても，各大学の実情や入学受入れの方

針（アドミッション・ポリシー）を踏まえ、実現可能な方法で適切に評価されることが望ましいと考えられる。」と述べており、英語資格・検定試験を活用する場合、アドミッション・ポリシーに基づき、英語資格・検定試験と学力検査等のいずれか有利となる方を選択的に使えるようにするといった措置の設定をする等の配慮を行った上で導入することを妨げてはいない。

1.2 大学入学者選抜における英語資格・検定試験の活用状況と先行研究

令和 5 年に実施された文部科学省(2024)の調査によると CEFR A2 レベル以上の資格を取得している高校生は 32.0%と 10 年前から約 3 倍に伸びており「A2 レベル相当以上を達成したと思われる高校生の割合は 50%を超えている」とある。この背景には大学受験でこれらの資格を活用されるようになったという面も考えられる。実際、旺文社 (2024) によると国公立大全体の 60.6%が活用しており、一般選抜だけに注目しても 2017 年度の 110 校から 2024 年度の 282 校と 2.56 倍に増加し、活用する方向に進んでいる。その中で一般選抜での利用方法の内訳は、置き換え（得点換算）が 68.8%，出願資格が 20.0%，加点が 19.0%であった。

また、教育測定研究所 (2019) によると、2017 年の大学入試センター試験の英語と英語資格・検定試験との対応関係については表 1 のようにあると報告がある。しかし、実施内容が変更された共通テストとの相関関係は報告されておらず、一般選抜において受験生が利用した英語資格・検定試験の 90%を占める実用英語技能検定（以下、英検）（旺文社教育情報センター, 2024）が含まれていない。

表 1 2017 年センター試験（英語）と
英語資格・検定試験の相関係数

	TOEIC	TOEFL	GTEC
合計点	0.645	0.545	0.562
筆記	0.626	0.474	0.567
リスニング	0.537	0.493	0.589
サンプル数（人）	2035	1369	110

注）教育測定研究所（2019）より改変

1.3 A 大学における英語資格・検定試験の活用

A 大学の工学系 2 学部の共通テストを利用する選抜では、その成績に応じて共通テストの外国語の得点に対して、共通テストを課さない選抜においては適性

検査の英語の得点に対して配点の最大 20%まで加点する制度を採用してきた。その結果、2021～2023 年度選抜において一般選抜では約 5 割、学校推薦型選抜と総合型選抜では約 7 割の志願者がこの制度を利用した（木村ほか, 2024）。なお、2024 年度選抜は GTEC の CEFR 区分変更に伴い、換算表が変更された（表 2）が、一般選抜では約 5 割、学校推薦型選抜と総合型選抜では約 7.5 割の利用があった。

2. 本研究の目的

本研究では A 大学での事例をもとに、学習指導要領に基づいて作成されている共通テストの英語が高等学校までの教育課程において重視される「総合的な英語力」をどの程度反映しているかについて、文部科学省（2018）を参考に大学入試英語成績提供システムへの参加要件を満たしていた 2 つの資格・検定試験と TOEIC IP、およびそれらが対応する CEFR の区分を共に調査した。また、公平性及び公正性の観点を考慮する必要がない場合、共通テストにおける英語の試験を英語資格・検定試験に置き換えることの妥当性についても検証した。

表 2 A 大学における英語資格・検定換算表（抜粋）

換算 割合 (%)	英検，英検CBT，英検S-CBT， 英検S-Interview 〔注〕					GTEC (検定版) (CBT)
	各受験級のCSEスコア判定対象範囲					
	1 級	準 1 級	2 級	準 2 級	3 級	
20	2630以上					1350以上
18	2304	2304以上				1190
16		2150	2150以上			1090
14		1980	1980			980
12			1950			960
10			1850	1850以上		850
8			1790	1790		790
6			1728	1728		720
4				1700		690
2				1670	1670以上	650
0	2304未満	1980未満	1728未満	1670未満	1670未満	650未満

[注] 英検はCSEスコアにより換算点の判定を行うが、各受験級の試験内容で判定可能とされている範囲のスコアを対象とする。

3. 調査方法

3.1 スコアの収集

本研究では 2021～2024 年度選抜において A 大学への出願時に提出のあった英語資格・検定試験の成績（スコア）のうち（公財）日本英語検定協会が実施する英検（延べ 5479 件）と（株）ベネッセコーポレーションが実施する GTEC（Global Test of English Communication）の検定版及び CBT（延べ 1459

件)を利用した。さらに、大学入試センターから提供された英語のリーディング及びリスニングの得点(延べ5124件)を用いた。さらに入学後については入学後にA大学で一斉に実施した一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会のTOEIC IP(リーディングとリスニングのみ、延べ3237件)のスコアを用いた。その分布は図1の通りであった。

なお、A大学では、表2の換算表に基づき、各選抜の外国語(英語)の配点に対して換算割合を乗じて、その得点を加算する方式を採用していた。また、2021~2024年度入学者選抜において英検とGTEC以外の申請は1%に満たなかったためこの2つ以外に絞って検証を行った。

3.2 CEFRの区分ごとの分析方法

本研究では「各資格・検定試験とCEFRとの対照表」文部科学省(2018)及び主催団体が公開している情報((株)ベネッセコーポレーション, 2022; (公財)日本英語検定協会, 2024; (一財)国際ビジネスコミュニケーション協会, 2024)を基に英語資格・検定試験の成績をCEFRの各区分の上限点と下限点の中央を基準に上位帯・下位帯に分けて分析した。

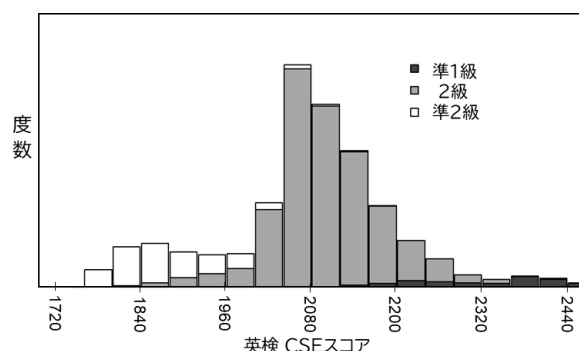
4 結果及び考察

4.1 英語資格・検定試験の成績と共通テストの相関性

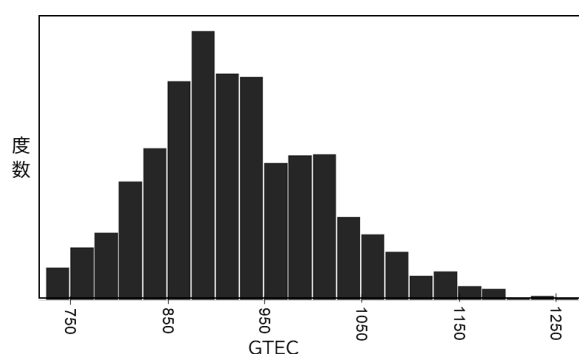
図2の通り、英検と共通テスト(合計)の得点には正の相関(相関係数 $R = 0.545$)がみられた。また、GTECと共通テスト(合計)の得点にも正の相関($R = 0.627$)が見られた。2つの検定試験を比べるとどの年度においてもGTECの方が英検よりも相関性が高いことが分かった(表3)。これは、英検2級のCSEスコアの分布が2000点付近に特に集中していることや、CEFRの区分ごとで見た場合、GTECよりも英検の方が共通テストのスコアの97%区間(1.5×四分位範囲)が広いことによる(図2, 3)。

またCEFRごとに分布を比較するとA2~B2においてはCEFRのレベルが上がると共通テストの得点も上がる傾向がある。このことから共通テストは、従来の高等学校の英語教育の目指していたA2~B1及び現行の高等学校の英語教育の目指すB1~B2の範囲においてある程度総合的な英語力の評価として成り立っていると考えられる(図3)。

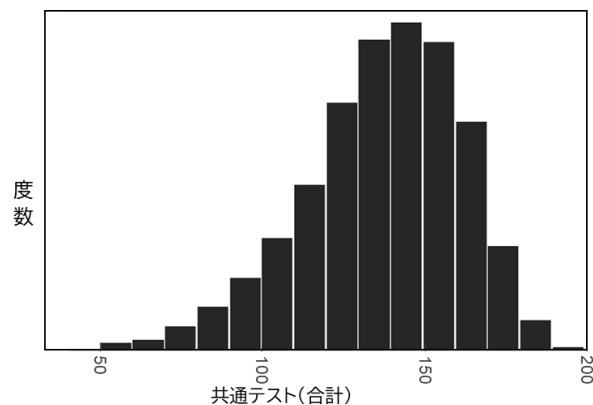
(A) 英検



(B) GTEC



(C) 共通テスト(英語:合計)



(D) TOEIC IP (Total)

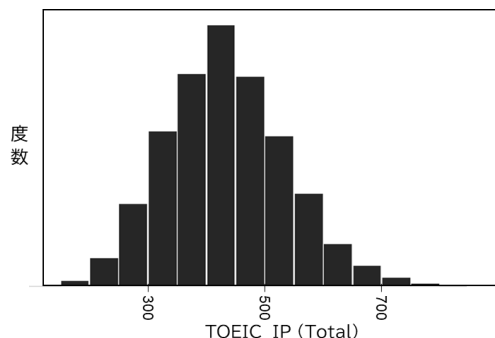
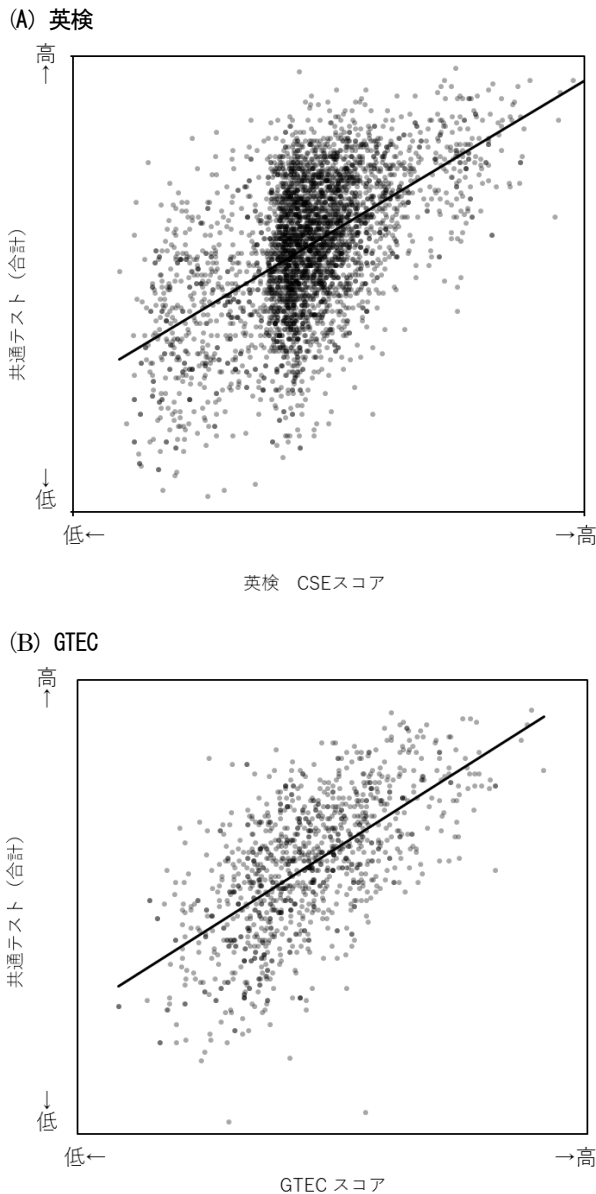


図1 A大学における英語資格・検定試験及び共通テストの成績の分布(2021~2024年度)

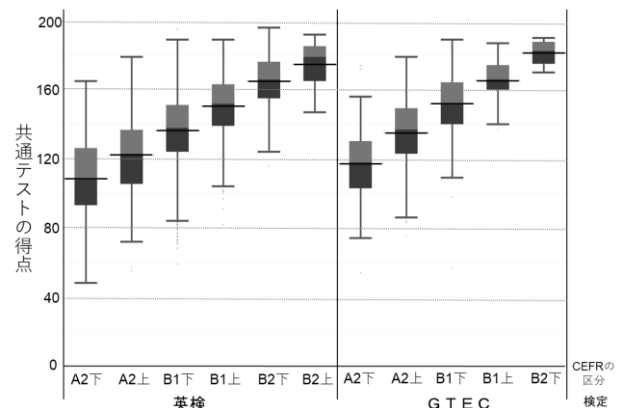
表 3 英検及び GTEC に対する
各年度の共通テスト（合計）の相関係数

年度	英検	GTEC
2021	0.553	0.617
2022	0.526	0.679
2023	0.541	0.562
2024	0.562	0.708
合算	0.545	0.627

図 2 英語資格・検定試験と共通テストの
成績の分布 (2021-2024 年度)

注) 点の濃淡は同じ得点の度数の多寡を表す

なお、同一の CEFR レベルであっても共通テストにおいては、中間層にあたる第 1 四分位から第 3 四分位の範囲では 40~60 点の差があり、B1 レベルであっても共通テストの平均点以下の成績をとる事例もある (図 3)。このことから受験時期、一回あたりの試験結果のバラツキなど考慮すべき点が残ることは留意すべきである。A 大学では、これまで加点方式であったことから、共通テストでも高得点が必要となり、共通テストへのモチベーションの低下は考えづらい。加点方式では 2 回の試験の合計による評価であるのに対して、置き換え方式の場合には、高得点側を採用する評価であることから、この拡がりには特に考慮すべきかも知れない。

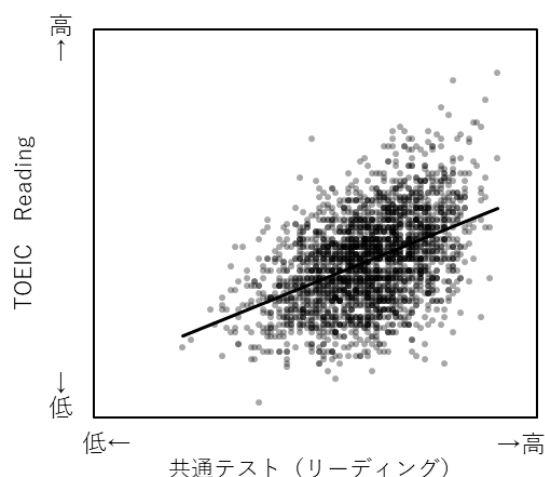
図 3 CEFR の区分ごとの共通テストの得点分布
(2021-2024 年度)

注) 上下のバーは $1.5 \times \text{IQR}$ もしくは最大値/最小値を示し、中央付近のバーは平均値を示す。

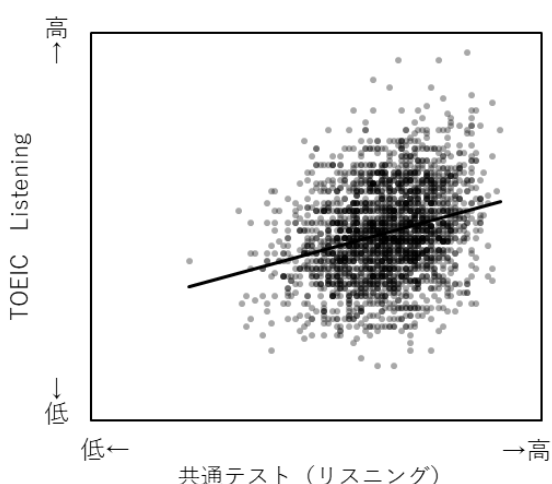
4.2 TOEIC と共通テストの相関性

入学者を対象に行った「読む」「聞く」の 2 技能を評価する TOEIC IP テストの結果と共通テスト（合計）の得点には正の相関 ($R = 0.526$) がみられた (図 4, 表 4)。リーディングとリスニングに分けてみるとリーディングは $R = 0.454$ と正の相関がみられた一方で、リスニングについては年度ごとの差が大きく、4 年間全体では $R = 0.273$ とあまり相関がみられなかった (図 4, 表 4)。しかし年度ごとで見るとリーディングほどではないものの、リスニングも正の相関性がみられた (表 4)。さらに合計点だとより相関性が高いことから、単年度であれば「読む」「聞く」の 2 技能の英語力を評価できていたと考えられる。なお、本データについては入学者のみのデータであることから切断効果ははたらいっている可能性は考慮しなければならない。

(A) 共通テスト（リーディング）－TOEIC IP Reading



(B) 共通テスト（リスニング）－TOEIC IP Listening



(C) 共通テスト（合計）－TOEIC IP Total

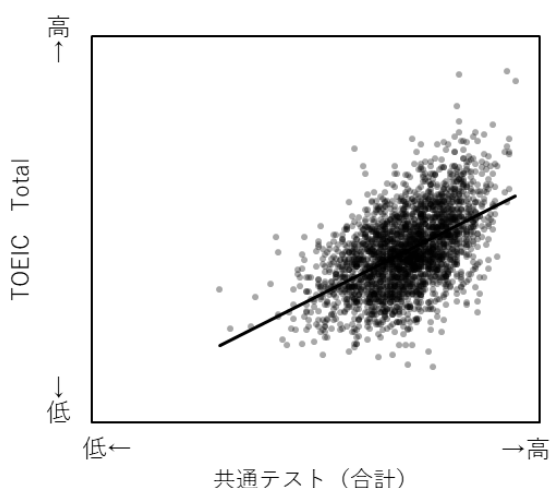


図4 共通テストと TOEIC IP の得点分布
(2021-2024 年度)

注) 点の濃淡は同じ得点の度数の多寡を表す

表4 各年度の共通テストと TOEIC IP の相関係数

年度	Reading	Listening	Total
2021	0.411	0.409	0.536
2022	0.476	0.481	0.584
2023	0.564	0.378	0.574
2024	0.491	0.403	0.543
全体	0.454	0.273	0.526

注 Reading は共通テストのリーディングに対して、
Listening は共通テストのリスニングに対して
の値である。

4.3 英語資格・検定試験の成績と TOEIC の相関

次に4技能を総合的に評価する英検及び GTEC と「読む」「聞く」の2技能を評価している TOEIC IP について比較したところ、英検とは $R=0.455$ 、GTEC とは $R = 0.606$ と正の相関がみられ、共通テスト同様、英検よりも GTEC の方が強く相関していた(図5, 表5)。但し、本データについても入学者のみのデータであることから切断効果がはたらいっている可能性は考慮しなければならない。

また、CEFR B1 レベルとなる領域で比較すると、英検の B1 以上(1950 点以上)のうち TOEIC で B1 以上(550 点以上)を満たすものは 15%、GTEC の B1 以上(930 点以上)のうち TOEIC で B1 以上を満たすものは 38%と、CEFR を指標としたとき、その結果は英検・GTEC と TOEIC IP との間で大きく異なっていた(図6)。このことから CEFR のみを基準として換算表を作成するのは妥当とは言えないと考える。

一方、共通テストは TOEIC IP と同様にリーディングとリスニングの2種の試験でありながら、総合的な英語力を評価する英検及び GTEC のいずれとも、TOEIC IP よりも相関があるという結果になった(表3, 4, 5)。このことは総合的な英語力を評価することを目指している高等学校の英語教育の成果を評価する試験としても共通テストの英語がある程度妥当なものであることを示している。さらに、英検や GTEC といった4技能を課す資格試験のスコアを共通テストのスコアと置き換えることは、2技能のみを課す TOEIC IP よりも妥当であると考えられる。

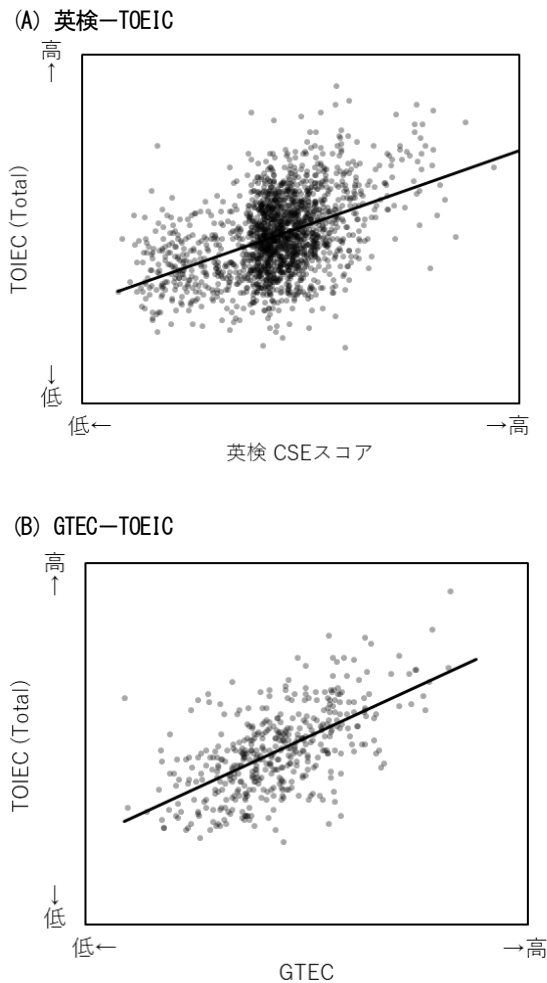


図 5 英語資格・検定試験と TOEIC IP の得点分布
(2021-2024 年度)

注) 点の濃淡は同じ得点の度数の多寡を表す

表 5 入学前の英検及び GTEC に対する
入学直後の TOEIC IP の相関性

	相関係数
英検	0.455
GTEC	0.606

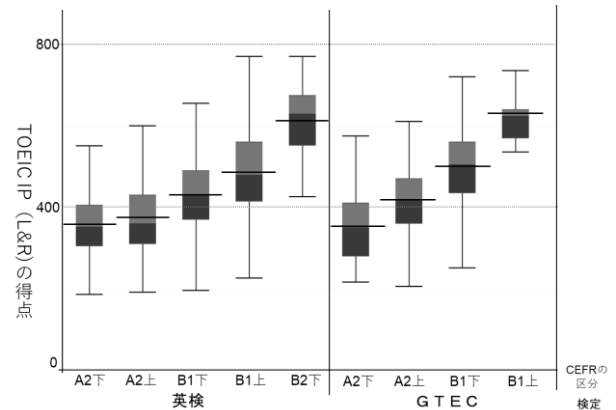


図 6 CEFR の区分ごとの TOEIC IP の得点分布
(2021-2024 年度)

注) 上下のバーは $1.5 \times IQR$ もしくは最大値／最小値を示し、中央付近のバーは平均値を示す。
また GTEC B2 下は十分なサンプル数がないため省略している。

5. まとめ

5.1 結論

大学入学共通テストの英語の得点は 2 技能評価である TOEIC IP よりも 4 技能評価である英検や GTEC のスコアとの方が高い正の相関性がみられた。このことは、「外国語能力の向上に関する検討会」や、政府の教育再生実行会議「第三次提言」の報告や提言などの中で、高度な言語活動 (CEFR B1~B2 レベル) による高等学校での英語教育の評価として共通テストは 2 技能であっても妥当であるといえる。また、公平性及び公正性の観点を含めなければ、それぞれの試験間で一定のルールに基づいて英検や GTEC のそれぞれのスコアを共通テストのスコアと置き換えて利用することについても妥当性はあると考えられる。但し CEFR を指標とした場合、英検と GTEC との間で差があることから CEFR のみを基準として換算表を作成することについては妥当性が高いとはいえない。

5.2 今後の課題

本研究は A 大学の工学系 2 学部の結果に基づいたものであり、特に英検の CSE スコアの分布が特定の得点帯に偏っている。さらに、図 2 に示されるように、同一の英検・GTEC のスコアであっても共通テストの成績には無視できない差がある。これは受験時期や 1 回受験によるばらつきによるものか、それとも資格試験の特性の差によるものなのかを検証する必要がある。また TOEIC はビジネス英語に寄っている

など、それぞれの試験では想定される場面や重視している語彙などに差があるという意見もあるため、他の資格試験との比較についても必要であろう。

またリーディングとリスニングの 2 種類の試験であっても 4 技能評価である英検・GTEC と 0.5～0.7 の相関性があったことから、出題方法等を工夫することで 4 技能のテストに拘らずとも総合的な英語力を評価できる可能性があるといえる。加えて、高大接続の観点から英語資格・検定のスコアと共通テストの得点のどちらが入学後の学修に影響を及ぼしているのかについても検証する必要があるのではないかと考えた。

なお、本研究では英語教育の在り方に関する有識者会議（2014）及び文部科学省（2017）に基づき、高度な言語活動を求める高等学校での英語教育を評価する方法として文部科学省の提示している CEFR 及びそれに基づいた英語資格・検定を軸として検証した。しかし、英語教育の観点から CEFR が高校の英語力の評価指標として妥当であるかということについては異を唱える意見もある（拝田, 2021; 大学入試のあり方に関する検討会議, 2021）。

以上のことから、引き続き多面的な観点かつ他大学等と協力するなどして調査を続ける必要があるといえる。

注

1) 本研究については九州工業大学に所属している期間にのみ参画

謝辞

本研究を進めるにあたり、本学アドミッション・オフィサーの寺田登与徳先生及びアドミッション・オフィサー補佐の児玉幸子先生により分析結果や英語教育の現状について助言をいただきました。また調査にあたり本学教養教育院言語系教員や複数の中学・高校の英語科教員及び教員経験者にご意見を頂戴しました。ここに記し謝意を表します。

参考文献

(株)ベネッセコーポレーション (2022 年 8 月 23 日).

「『GTEC』Advanced・Basic・Core・CBT タイプ

CEFR・CEFR-J 閾値スコア変更のお知らせ」(2023 年 12 月 1 日).

大学入試のあり方に関する検討会議 (2021 年 7 月 8 日). 「大学入試のあり方に関する検討会議 提言」文部科学省

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/103/toushin/mext_00862.html (2024 年 4 月 17 日).

英語教育の在り方に関する有識者会議 (2014 年 9 月 26 日).

「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」文部科学省
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm (2024 年 2 月 26 日).

拝田清 (2021). 「日本の大学言語教育における CEFR の受容—現状・課題・展望」科学研究費助成事業 基盤研究(B)研究プロジェクト 『アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究—研究成果報告書(2018–2020)—』 153–170.

萩生田光一 (2019 年 11 月 1 日). 「受験生をはじめとした高校生、保護者の皆様へ」文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/1422381_01.pdf (2024 年 2 月 26 日).

木村智志・播磨良輔・大石哲也・安永卓生 (2024). 「九州工業大学における多面的・総合的な入試の制度設計検証Ⅱ」大学入試研究ジャーナル **34**, 126–133.

(一財)国際ビジネスコミュニケーション協会. 「TOEIC® Program 各テストスコアと CEFR との対照表」
https://www.iibc-global.org/toeic/official_data/toeic_cefr.html (2024 年 6 月 19 日).

教育再生実行会議 (2013). 「これからの大学教育の在り方について」(第三次提言)首相官邸
<https://www.kantei.go.jp/jp/headline/kyouikusaisei/2013.html> (2024 年 4 月 17 日).

教育測定研究所 (2019). 「『先導的大学改革推進委託事業』大学入学者選抜における英語 4 技能評価への移行支援に関する調査研究成果報告書」文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/_icsFiles/afielldfile/2019/03/29/1415009_1.pdf (2024 年 4 月 17 日).

文部科学省 (2017). 「大学入学共通テスト実施方針策定に当たっての考え方」文部科学省
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afielldfile/2017/10/24/1397731_002.pdf (2024 年 4 月 17 日).

文部科学省 (2018). 「各資格・検定試験と CEFR との対照表」文部科学省
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/091/gijiroku/_icsFiles/afielldfile/2018/07/27/1407616_003.pdf (2024 年 4 月 17 日).

文部科学省 (2024). 「令和 5 年度 『英語教育実施状況調査』について」文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043_00005.htm (2024 年 5 月 20 日).

文部科学省高等教育局長 (2019 年 6 月 4 日). 「文部科学省高等教育局長通知 令和 3 年度大学入学者選抜に係る大学入試英語成績提供システム運営大綱」文部科学省

https://www.mext.go.jp/content/20191224_mxt_daigakuc02-000003553_9.pdf (2024 年 4 月 12 日).

文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課 (2013 年 12 月 15 日). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1343704.htm (2024 年 2 月 26 日).

(公財)日本英語検定協会. 「英検 CSE スコアとは」
<https://www.eiken.or.jp/cse/> (2024 年 4 月 17 日).

日本学術会議言語・文学委員会文化の邂逅と言語分科会 (2020 年 8 月 18 日) 「大学入試における英語試験のあり方についての提言」日本学術会議

<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t292-6.pdf>
(2024 年 2 月 26 日).

旺文社 教育情報センター (2024 年 2 月 20 日). 「外部検定利用入試 2024 年は 462 大学！」旺文社

https://eic.obunsha.co.jp/file/exam_info/2024/0220.pdf (2024 年 4 月 17 日).